令和 2年 2月

田本直弘　学位論文審査要旨

主　査　　本　倉　　徹
副主査　　難　波　範　行
同　　梅　北　善　久

主論文

Subclinical Epstein-Barr virus primary infection and lytic reactivation induce thyrotropin receptor autoantibodies

（不顕性エプスタイン - バーウイルスの一次感染と溶解性再活性化は甲状腺刺激ホルモン受容体自己抗体を誘導する）

（著者：田本直弘、長田佳子、原小百合、中山祐二、桑本聡史、松下倫子、加藤雅子、林一彦）

令和元年　Viral Immunology　32巻　362頁～369頁

参考論文

1. シクロスポリンが奏効した難治性川崎病の1例

（著者：田本直弘、星加忠孝、後藤保、岡本賢、細田千佳、大野光洋、木下朋絵、田村明子、宇都宮靖、常井幹生、橋田祐一郎、神崎晋）

平成23年　Progress in Medicine　31巻　1726頁～1729頁

審　査　結　果　の　要　旨

本研究は、小児における不顕性のEBV初感染とバセドウ病の原因自己抗体であるTRAB産生との関連、そしてTRAB（+）細胞とEBV（+）細胞、ならびにTRAB（+）EBV（+）細胞の発現時期について、6つの年齢層に分けた小児の血液を用いて解析し、成人と比較検討したものである。

その結果、EBV初感染では、無症候性であってもTRABの産生がおこることを示し、TRAB（+）細胞、EBV（+）細胞、TRAB（+）EBV（+）細胞は、EBV初感染の後、再活性化を繰り返すことによって増加していくことを示唆した。これは、バセドウ病の発症が幼少期に少なく若年成人からおこることを説明する一因と考えられた。

本論文の内容は、小児におけるEBV感染とTRAB産生の関連を検討した初めての研究であり、明らかに小児科学と臨床検査医学分野の学術水準を高めたものと認める。